

論証的意味論にもとづいた のぞましき述語の記述をめぐる

大久保 朝 憲

はじめに

本稿では、品質形容詞の反意語ペア、そのなかでも、のぞましきの評価にかかわる語（のぞましき述語）を、ペア相互の意味論的諸関係に注意をむけながら、論証的意味論 *Sémantique argumentative* の観点から考察する。

本稿の議論は以下の手順でおこなわれる。まず、本稿の議論で必要となる、論証意味論のいくつかの概念について要約する。つぎに、きわめて単純なタイプの品質形容詞をとりあげ、一般に、ある品質形容詞 X およびその否定 *pas X*、X の反意語 Y とその否定 *pas Y* は、論証的矩形 *carré argumentatif* の 4 つの角に配置されることを確認する。そのうえで、筆者が「規範的偏向」となづけた現象が、この論証的矩形上で、どのように理解されるべきものであるかを論じ、のぞましき述語とその否定が、論証意味論的にどのように記述されるべきかを検討する。

1. 論証的意味論と論証的矩形

論証的意味論 *Sémantique argumentative* とは、フランスで Anscombe & Ducrot (1983) によって創始された言語理論で、「言語（ラング）の中の論証」というタイトルからもうかがわれるように、言語を論証の道具としてみるのではなく、言語構造の意味的側面は、それがどのような論証をみちびくかということにある、つまり、言語の意味とは論拠だてであるとする言語観に基礎づけられたものである。こうした観点からの研究

は、「言語内論証理論 *Théorie de l'argumentation dans la langue*」、「トポス理論 *Théorie des topoï*」といった理論的変遷をへて、Carel を中心とする次世代の研究者に批判的に継承され、「意味ブロック理論 *Théorie des blocs sémantiques (TBS)*」(Carel 2011) として結実した。「論証意味論」とは、こうした一連の理論的潮流の総称とあってよいものであるが、TBS は、論証性を、いわば言語の本質ととらえている点でそれまでの理論をもっとも急進化したものといえる。この急進化には、論証意味論にもとづく諸研究で共有されている、言語の非指示性という仮説を明示的に理論化したものであるという点がおおきく関与している。言語の非指示性とは、ソシュールによる、言語 *langue* とはそれを構成する要素の差異の体系であるという仮説をひきうけたものであり、言語現象を記述する際に、その要素の「指示対象」、命題が成立するために参照する、その命題が対応するとされる世界の事態といったものをふくみ入れることなく、言語を言語そのものによって記述しようとするスタンスのことである。そのために、論証意味論は「論証 *argumentation*」という言語的要素による言語現象の記述をめざし、その理論の精緻化をめざしている。

1.1. 論証的連鎖・論証側面・意味ブロック

このような視点から言語を観察するうえで、Carel は、およそすべての発話は、2 種類のコネクタ *DONC* と *POURTANT* による「論証的連鎖 *enchaînement argumentatif*」にむすびつけられるというつよい仮説を提示している。「意味ブロック理論のスローガンは、〔トポス理論が主張していたように〕あらゆる発話は論拠 *argument* である、というものではもはやなく、あらゆる発話は論証的連鎖 *enchaînements argumentatifs* にパラフレーズできるということだ」(Carel 2021 : 18)。本稿では、意味ブロック理論のすべてを説明する余裕はないが、以下、そのもっとも基本的な部分と、本稿の立論、とりわけ「論証的矩形」の理解に関係する部分のみについて説明する。

「論証的連鎖」とは、2つの意味内容 *X, Y* を コネクタ *DONC* (*DC* と

表記) もしくは POURTANT (PT と表記) でつないだもので表示される「論証局面 aspect argumentatif」を、発話として具体化したものである。論証局面は、X, Y の否定 NEG-X、NEG-Y をふくめて、たとえば (1) にしめすように、4 つの局面がひとくみとなって1つの「意味ブロック bloc sémantique」を成立させる。コネクタ DC によって成立する連鎖は「規範的連鎖 enchaînement normatif」、PT によって成立する連鎖は「違反的連鎖 enchaînement transgressif」とよばれる。たとえば、X=PROCHE、Y=POUVOIR Y ALLER. のような意味内容を想定すると、以下の4つの連鎖が、意味的に密接にむすびついたものとみとめられ、これを「意味ブロック」とよぶのである。

(1) 4つの論証局面からなる意味ブロック

X DC Y

X PT NEG Y

NEG X DC NEG Y

NEG X PT Y

意味ブロックはこのひとつとおりではなく、あとみるように、X DC NEG-Y / X PT Y / NEG-X DC Y / NEG X PT NEG Y のようになるばあいもあるが、4者の局面の意味的關係はおなじで、これについては、以下の「論証的矩形」の説明の際に詳述する。意味ブロックの具体的なイメージをつかむために、X、Y に具体的な意味内容を代入してみよう。

(2) 意味ブロック : PROCHE CONN POUVOIR Y ALLER を構成する論証局面

a. PROCHE DC POUVOIR Y ALLER

b. PROCHE PT NEG POUVOIR Y ALLER

c. NEG PROCHE DC NEG POUVOIR Y ALLER

d. NEG PROCHE PT POUVOIR Y ALLER

CONNとは、DCもしくはPTのコネクタのどちらかであることをしめし、上記にはでてこないが、どちらかのコネクタがCONNと表示されれば、もうひとつはCONN'と表示される。さて、(2)の4つの論証局面は、これらに意味的にむすびつくように発話のなかにふくまれる意味内容が、おなじであることをしめしている。たとえば下記のような論証の連鎖をみてみよう。

- (3) a. C'est proche, **alors** on peut y aller.
 b. On ne peut pas y aller **même si** c'est proche.
 c. On ne peut pas y aller **parce que** ce n'est pas proche.
 d. Ce n'est pas proche, **pourtant** on peut y aller.

(3a) - (3d) は、それぞれ (2a) - (2d) に対応する論証の連鎖の一例である¹⁾。後者は、要するに前者を (1) よりさらに具体化した実際の発話であり、意味内容 PROCHE, POUVOIR Y ALLER なども定形の発話となっている。またコネクタは局面レベルではDC/PTからの二者択一であるが、実際の発話では、このコネクタのやくわりは、さまざまな言語表現によって実現する(太字部分参照)。どんなかたちで実現しようとも、それが(2)のいずれかの論証局面の具体化であることが確認できるかぎりにおいて、(3) およびそれをふくむすべての発話は、距離のとらえかたが要因となって、いくかいけないかをきめるようになっているという点で、意味ブロックを共有している。「ちかいからいける」ことと、「ちかいかいけんない」ことは、距離の認識が、そこにいけるかいけないかの決定についておなじ意味関係をもつものとして共有されており、それはさらに「ちかくないからいけない」「ちかくないかえいける」とも同様に共有されているものである。このときの PROCHE、NEG PROCHE とは、漢

1) 論証局面 (2) は、実際の発話である論証の連鎖 (3) およびほかの実現例の、いわば「母型」となっているといてもよいだろう。

然とした「ちかい」「ちかくない」ではなく、また測定可能な実際の距離でもなく、「そこにこれからでかけてゆく」ことが認可されるかどうかということに即して評価されるものである。このとき、コネクタを介して接続されている2つの意味内容は「意味的に相互依存 *interdépendance sémantique*」している。この点について、Gomes & Dall' Cortivo Lebler (2021) が、非指示主義的観点から、以下のように注記している。

「この『意味的相互依存』の現象は、すべての論証的關係においてみられるもので、規範的連鎖が、2つの独立した情報をむすびつける論理的推論によって実現するという仮説をしりぞけるものである。TBSによると、〔規範的・違反的の〕2つの連鎖のどちらがわにも、推論や演繹といった関係は存在しない。」

(Gomes & Dall' Cortivo Lebler 2021 : 88)

1.2. 単語を具体化する論証局面

以上までの議論では、論証的局面が、実際の発話としての論証的連鎖((3)参照)として具体化される事例をみたが、TBSでは、単語の意味内容が、特定の論証局面にむすびつく事例も論じられている。そのばあい、その単語自体が、むすびついた論証局面にふくまれるもの(外在的論証 *argumentation externe* (AE))と、単語自体が論証局面にふくまれず、論証局面そのものがその単語の意味となるばあい(内在的論証 *argumentation interne* (AI))があるが²⁾、ここでは本稿の議論との関連がふかい、内在的論証についてみておこう。

「たとえば、単語 *prudent* の内在的論証には、DANGER DC PRÉCAUTION

2) 外在的論証については、その単語がXであるとして、論証がX DC Yの形式になるか、Y DC Xの形式になるかで区別されているが、本稿では外在的論証をあつかわないので説明を割愛する。

がふくまれる。というのも、Pierre a été prudent という連鎖は、Pierre a vu un danger donc il a pris des précautions という、単語 prudent があらわれない連鎖にいいかえることが可能だからである。」

(Gomes & Dall' Cortivo Lebler 2021 : 93)

これと同様の事例を、本稿があつかう品質形容詞からもみつけることができる。形容詞 gentil には、その内在的論証として、論証側面 NEG PROBLÈME PT AIDE をむすびつけることができる。そのいっぽうで、gentil の反意語 méchant には、論証側面 PROBLÈME PT NEG AIDE をむすびつけられるとすると、両者はおなじ意味ブロックにふくまれる論証側面を意味としてもっていることになる。このことから、意味ブロック内の4つの論証連鎖相互の意味的關係を記述することによって、上記の gentil/méchant のような反意語間の意味的關係、あるいはまた、ある述語を否定することが、論証意味論的観点からどのようなことを意味するのかということがあきらかになる可能性がある。そのための指針を提供してくれるのが、冒頭にのべた「論証的矩形」である。

1.3. 論証的矩形

あるひとつの意味ブロックを構成する4つの論証局面は、コネクタを転換し、適宜否定を挿入することでえられることは、すでにのべたとおりで、このプロセスをへてえられた4つの論証局面では、XとYが共通の意味的相互依存性をもっている。X DC Yを出発点として³⁾ ブロックを

3) このようにいうからといって、X DC Y という論証局面になんらかの特権的地位があたえられているわけではなく、意味ブロック構築のためのつづきとして便宜上このようにみただけである。だからこそ、つぎの例では別のタイプの論証局面が「出発点」になっている。理論的には、以下から構築できる論証局面はすべて意味ブロックを構築できる。

{X/NEG X} {CONN/CONN}{Y/NEG Y}

構築するばあいは以下ようになる。

- (4) X DC Y
 NEG X DC NEG Y
 X PT NEG Y
 NEG X PT Y

これに対して、たとえば A PT NEG B を基礎に意味ブロックを構築すると以下ようになる。

- (5) a. A PT NEG B
 b. NEG A PT B
 c. NEG A DC NEG B
 d. A DC B

具体的な表現型がどのようなものであれ、「あるブロックの内部で、〔論証〕局面をたがいにむすびつける〔意味的〕関係があることで、論証的矩形を構築することができる。(アリストテレスのその論証意味論版である) 論証的矩形とは、意味ブロックの内的組織化をしめすひとつの方法である」(Lescano 2011/2013: 14) ということになる。そこで本稿では、(5) の意味ブロックをもとにそれを構成する論証局面相互の関係を以下のとおり例示する⁴⁾。

4) 以下の理論的説明については、Delanoy (2021) を参照した。

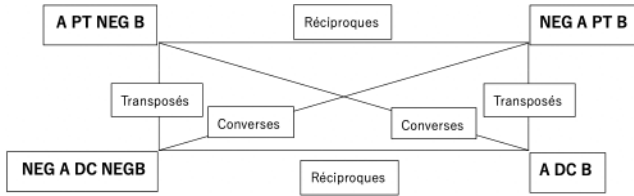


図 1 : 論証的矩形①

矩形の4つの角には、1つの意味ブロックを構成する4つの論証側面が配置され、それら相互の論証意味論的關係がしめされている。これを(5)と対照しながらみると、(5a)と(5d)、(5b)と(5c)はconverseの關係、(5a)と(5b)、(5c)と(5d)はréciproqueの關係、そして(5a)と(5c)、(5b)と(5d)はtransposéの關係にあることになる。converse 關係にある論証局面では、コネクタ DC と PT の交替があり、後件 B の極性が転換する (B は NEG B、NEG B は B となる)⁵⁾。réciproque 關係にある論証局面では、コネクタの交替はなくおなじものが維持されるが、極性が前件・後件⁶⁾とも転換する。これに対し、transposé 關係にある論証局面では、コネクタの交替と前件 A のみの交替がおこる。以上のことは下記の表のように整理される。

5) Delanoy (2021) では「後件に否定があらわれる」とされているが、もともと後件に否定があるばあいはその否定がきえて肯定になることから、「極性が交替する」という本稿の記述のほうが正確であると判断した。

6) TBS では、X CONN Y の X を support、Y を apport とし、論理学で使用される antécédent、conséquent と区別しているが、本稿では後者の日本語にあたる「前件」「後件」の語を、(論理学の概念と混同しているという誤解が生じない範囲で)そのまま使用する。本来ならば意味をとって support = 「基底項」、apport = 「参入項」などの訳語を導入すべきところであるが、本稿では、こうした訳語の妥当性に確信もなく、それで議論がよりわかりやすくなるわけでもない判断し、意味的に単純な用語法とした。

表 1 : 論証局面間の意味関係

	コネクタの交替	極性の転換 (前件)	極性の転換 (後件)
converse	○	×	○
réciroque	×	○	○
transposé	○	○	×

このように論証局面を対照させ、その意味関係を分類することにどのような意味があるかということについて、Delanoy (前掲書 : 104) は以下のようにのべている。

converse 関係は否定にむすびつけることができる。ある話者が *Cette veste est bon marché, donc je vais l'acheter* というとき、この話者は即座に **ÊTRE BON MARCHÉ DC ACHETER** という論証局面を採用することになる。そこで別の話者があらわれて、*Je ne suis pas d'accord ! Bien que ce soit bon marché, vous ne devriez pas l'acheter.* というとき、この話者は **ÊTRE BON MARCHÉ PT NEG ACHETER** という論証局面を採用することになる。

réciroque 関係にも意見の対立はあるが、上記とはちがうものである。上記の第一の話者のおなじ発話に対し、ここではまた別の話者が *Je ne le pense pas ! La veste n'est pas bon marché, donc vous ne devriez pas l'acheter !* といって反論するとき、この発話がむすびつく論証局面は、**NEG ÊTRE BON MARCHÉ DC NEG ACHETER** となる。

transposé 関係では、また別の論証の可能性がしめされている。ここでは、おなじ第一の話者に対して、別の話者が、*Je ne pense pas qu'elle soit bon marché, mais vous devriez l'acheter tout de même* と発話することができて、そのとき、この発話は論証局面 **NEG ÊTRE BON MARCHÉ PT ACHETER** にむすびつく。

以上、意味ブロック内の4つの論証局面がどのような意味関係によってむすびついているかを、converse, réciroque, transposé という3つの概

念⁷⁾によって記述できることを確認した。つづく節では、それぞれの論証局面が単語の意味にむすびつくときに、どのようなことが観察されるのか、とりわけ、通常「反意語」とよばれるものの反意性が、論証意味論ではどのように記述されるのかということについて、冒頭にのべたように、のぞましさ述語とその否定の意味を検討しながら論じてゆきたい。

2. 論証の意味論によるのぞましさ述語の記述

2.1. のぞましさ述語（規範的評価述語）と中立的評価述語

大久保（2016）・大久保（2020）で導入・整理したように、*X est Y* (*Y*=形容詞・名詞述語) という形式の発話は、*X* についての話者の評価をつたえる「評価的発話」と、*X* について話者が事実とみなすことがらを確認するものとしてのべられる「確認的発話」に区別される⁸⁾。つぎに、前者の評価的発話にふくまれる述語について、その意味に「のぞましさ」がふくまれているかどうかによって、ふくまれているものを「のぞましさ述語（または「規範的評価述語」）」、ふくまれていないものを「中立的評価述語」とした。このような分類の根拠は、Ducrot (1973: 125) で指摘されたように、規範的評価述語のなかでも、*beau, intelligent* のように優位ののぞましさをもつ述語（優位評価述語）が、否定において特徴的な意味的偏向をしめすことが観察されるからである。優位評価述語の否定は、その他の評価述語の否定とちがって、あきらかにその反意語の意味にちかづく。Ducrot (同上) によると、「*Pierre n'est pas gentil* という発話は、しばしば *Pierre est méchant* に非常にちかい。これに対し、*Pierre n'est pas méchant* は *Pierre est gentil* に等価というにはほどとおい。」大久

7) これらの概念についての日本語訳も、本稿ではさしひかえ、原語表記のままとした。

8) 両者の識別法としては、当該発話をうけて「わたしもそうおもう」「わたしはそうおもわない」とかえすことができるものが評価的発話で、そうできないものが確認的発話となる。詳細については大久保（2020）を参照。

保（前掲書）では、これを「規範的偏向」となづけ、このような偏向は、「偏向」ではありながら、規範的評価述語の定義的属性とみなすにいった。

2.2. 中立的評価述語の論証的矩形への配置

以上を確認のうえ、評価述語が論証的矩形にどのように配置されるかを考察する。その目的は、評価述語とその反意語およびそのそれぞれの否定が、*gentillesse/méchanteté*を両極とするスケール状の特定のめもりに位置しているとかんがえることへの疑問の検証である。たしかに、*long/court*のような中立的評価述語では、*long>pas long>pas court>court*という順番で、これらの述語が「ながさ *longueur*」についての具体的な尺度上にならんでいるようにとれなくもない。しかし、評価の対象がいかなるものの実寸法であれ、上記の4つの述語が指示しうる自然な範囲の設定というのは不可能で、特定の实寸法をどの述語をもって評価するかの決定は、当該発話がなされるこまかな文脈と、最終的には話者の主観に左右される。そこで本稿では、こうした評価述語が単語としてどのような論証的意味をもつか、つまりどのような論証側面にむすびつくかをしらべることで、あるものが *long, court, pas long, pas court* であるとは何を意味しているのかをさぐることにしたい。

まず、評価的発話の述語のなかで、本稿で「中立的評価述語」と分類される例として、上記の *long/court* というペアをかんがえてみよう。これらの述語は、文脈の支援なしでは「ながいこと」あるいは「みじかいこと」がよいともわるいともいうことができない（中立的）。そのいっぽうで、この種の形容詞とその反意語は、論証的矩形の4つの角に配置することができる。そのことをうらづけるのが、それぞれの形容詞の内在的論証として、以下のような論証局面がむすびつき、その意味の一部となっているということである。

- (6) a. DISTANT PT ATTEINDRE
 b. NEG DISTANT PT NEG ATTEINDRE
 c. NEG DISTANT DC ATTEINDRE
 d. DISTANT DC NEG ATTEINDRE

すでに論じたように、「ながさ longueur」は通常、寸法や距離を測定することでしられる、というのが素朴な世界認識で理解できることである。これに対して、言語の「反指示主義」を標榜する論証意味論では、対象の実寸法や対象までの現実の距離を参照して、それを long あるいは court と評価するのではなく、long/court ということ、どんな論証の連鎖が生じるかということ、を重視する。これらの形容詞に内在的に（内在的論証として）むすびつきうる論証局面のひとつをかんがえてみよう。ある物体に関して long という（中立的）評価をあたえるとき、たとえば *Ces lacets sont longs* という発話は、くつをあしに固定するために、ひもあなのすべてを通過してさきまでひもとおすという「距離」をカバーできる十分なながさがあって、さきまで到達できるようなとき（距離 PT 到達）になりたつ。「くつひもがながい」とは、その発話が (6a) のような論証的局面にむすびついているとういうことである⁹⁾。(6b) は、ひもあなの数もたいしてないのに最後までとおせないくつひも、つまり court の意味を記述したものとなる。(6c) は、ひもあなの数がすくないおかげで最後までとおせる、つまりみじかくはない pas court という意味をつたえるものである。最後に (6d) は、へだたりがおおきくて到達できない、

9) そのようにいうからといって、本稿は、形容詞 long の意味が、(6a) の論証局面によってつくされていると主張するわけではなく、long の語彙的意味内容を構成するその他の論証局面とともに (6a) がみとめられるということをおうとしている。さらにいえば (6a) が long に特化した論証的局面であるといっているわけでもなく、たとえば、*C'est loin, mais j'ai une voiture* のような発話における AVOIR UNE VOITURE にむすびついた論証局面とかんがえることもできるだろう。

すなわち「ながくない pas long」の意味となる。以下の (7) は (6) の論証局面にむすびつく論証的連鎖（発話）の例で、図 2 は、述語 long/court とその否定 pas long/pas court を論証的矩形上に配置したものである。

- (7) a. Ces lacets sont **longs**, on pourra les utiliser même pour ces grosses bottes.
 b. Ces lacets ne sont **pas longs** : on ne pourra pas les utiliser pour ces grosses bottes.
 c. Ces lacets sont **courts**, on ne pourra pas les utiliser même pour ces petits souliers.
 d. Ces lacets ne sont **pas courts**, on pourra les utiliser pour ces petits souliers.

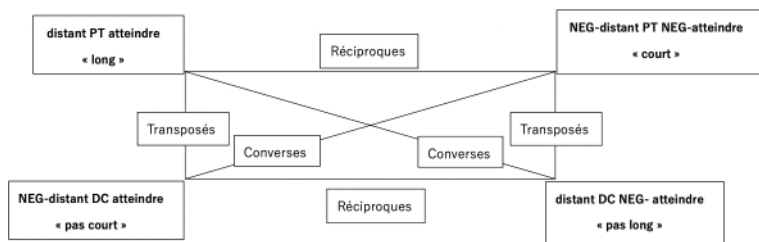


図 2 : long / court の論証意味論的意味

以上の論証意味論的な記述がまちがっていないとすると、尺度を設定してそのうえで適当なめもりを配分することによって long, court, pas long, court の意味とするという記述のしかたのほうが、言語表現の意味解釈としての根拠が薄弱で、尺度上のめもりという仮定は、意味解釈のためのメタファーのようにさえ感じられる¹⁰⁾。本稿のたちばでは、これらの述語

10) ここでは、情報伝達に関する「導管メタファー」をそのようによぶのと同趣旨で

のいずれについても、問題となっているのは尺度上の位置関係ではなく、論証意味論的關係の変化が問題となっており、これらの述語相互に観察される意味的親和性は、それらが同一の意味ブロックに参加し、論証的矩形の4つの角に配置されていることによる。中立的評価述語の上記のような分析は、long/courtにかぎらず、grand/petit、large/étroitなどの述語についても同様の分析が可能であることを予想させるものでもある。

2.3. のぞましき述語の論証的矩形への配置

のぞましき述語は、その語彙的意味そのものに倫理的方向性があらかじめふくまれているおかげで、その述語による述定内容がのぞましいものかのぞましくないものかということが、文脈の支援なしで判断できる述語のことである。このような語のよい例のひとつとして、さきに見た Ducrot (1973) で指摘されている事例である反意語ペア gentil/méchant とその否定 pas gentil, pas méchant をふたたびとりあげる。「やさしき gentillesse」とは、称賛すべき美点であり、Pierre est gentil という文が発話されれば、それは Pierre の人格や行為についてのちょっとした称賛であることはすぐにしられる。同様にその反意語 méchant についても Pierre est méchant という文は、Pierre に関する批判的な発話であらざるをえない。

2.3.1. 規範的評価述語における規範的偏向① : gentil/méchant

「規範的偏向」とは、すでにその概要をしめしたとおり、Ducrot (*ibid.*) によって指摘された意味的特異性を、本稿でそのように命名したものである。これを以下に再掲する。

「Pierre n'est pas gentil という発話は、しばしば Pierre est méchant に非常にちかい。これに対し、Pierre n'est pas méchant は Pierre est gentil に等

「メタファー」と表現していると理解されたい。

価というにはほどとおい。」

Ducrot は上記について、それが「反意語関係にある形容詞のペアに観察される」としているが、これはすべての形容詞ペアにみられるものではなく、規範的評価述語にかぎられる現象で、本稿では、2.1. でものべたように、ある述語が規範的評価述語であるかどうかをみきわめる基準でさえあるとかがえる。

このことについてかがえるために、以下の (8) の例を検討することからはじめたい。

(8) Ces lacets ne sont *pas longs*, mais ils ne sont *pas courts* non plus.

この発話が自然に理解されるとしたら、それは2つの述語 *pas long*、*pas court* が、くつひものながさを評価する尺度上で2つのことなるめもりをしめすからではなく、単に両者の意味がことなるからである。そこで、これら2つの述語を、それらにむすびついた内在的論証におきかえてみよう。前節でみたように、*pas long* には論証局面 DISTANT DC NEG ATTEINDRE がむすびつき、*pas court* には NEG DISTANT DC ATTEINDRE がむすびつくとした。両者が *mais* を介して対比されているのが (8) なので、ここでいわれているのは、「ひもあながおおいとどかないが、おおくなければとどく」といった内容である。したがって、つぎの (9) のようなディスコースが自然なものとして可能となる。

(9) On ne peut pas utiliser ces lacets pour ces bottes, mais on le peut pour ces souliers.

これに対して、規範的評価述語をふくむ *pas gentil*, *pas méchant* では事情がことなり、(9) と平行したディスコースが成立しにくい。

(10) ??Pierre n'est *pas gentil*, mais il n'est *pas méchant* non plus.

(10) が自然な発話として理解しにくいのは、Ducrot も指摘するように、*pas gentil* はのぞましさ述語のペアの優位評価述語 *gentil* の否定であり、その意味が反意語である *méchant* にあまりにもちかいので、(10) は (11) のように解釈されざるをえず、結果として *mais* の前後で矛盾したことがいわれているように感じられるためである。

(11) *Pierre est *méchant*, mais il n'est *pas méchant* non plus.

いっぽう、ここでも Ducrot の指摘するとおり、このおなじ対義語ペアで、この意味的偏向は *pas méchant* には観察されない。

(12) Pierre n'est *pas méchant*, mais il n'est *pas gentil* pour autant.

(12) は (10) の前半と後半をいれかえただけなので、論理的には同値の文によるディスコースであるが、*pas gentil* が *méchant* の意味にちかづくようには *pas méchant* の意味は *gentil* にはちかづかないので、(12) は (10) ほど奇妙なディスコースとはならない。この点について厳密にいうと、(10) と (12) の後半にあらわれる *pas méchant* と *pas gentil* は、それぞれの前半にあらわれる *pas méchant*, *pas gentil* と同義ではない。これは、前半の否定が記述的否定 *négation descriptive*、後半の否定が論争的否定 *négation polémique* であることによる。記述的否定とは、述語 X が否定辞 *pas* をともなって、記述的価値、すなわち特定のひとまとまりの意味 *pas X* をもつことで、論争的否定とは、文脈上で X が主張され (たとえばあいてがそのように主張している)、これに「X ではない」と反論するために *pas X* の形式が使用されることである。そうでなければ、たとえば (12) 後半の *pas gentil* が記述的否定と解釈されれば、これはふたたび *méchant*

にちかづき、(12) が自然に解釈されなくなってしまう¹¹⁾。

さて、つぎに gentil, méchant, pas gentil, pas méchant がそれぞれどのような論証局面を内在的論証としてもちうるかについてかんがえてみよう。gentillesse/méchancetéは、利他的な支援をどのようなときにできるか／できないかがかわるというとらえかたができる。たとえば、なんらかの問題でこまっている他者を見て、cette personne a des problèmes, alors aidons-la、という論証的連鎖は、PROBLÈME DC AIDEのように表現できる論証局面にむすびつけることができ、これは特に親切でなくとも、一定の良識があれば、よほど邪悪でないかぎり普遍的に発話できる論証的連鎖である。つまり、この論証局面は、「邪悪でない」pas méchantにむすびつくともとらえることができるだろう。これに対して、論証局面PROBLÈME DC AIDEのconverseであるPROBLÈME PT NEG AIDEは、前者の反論となりうるものだが、この論証局面には、さきにみた「よほど邪悪」すなわちméchantがむすびつく。ではgentilの内在的論証はどのようなものでありうるだろうか。こまっているひとをたすけるのは「あたりまえ」のディスコースをもたらすだけだが、親切さgentillesseとは、こまっていないものにさえ手をさしのべる態度であるとかんがえられるとすると、gentilには、NEG PROBLÈME PT AIDEがむすびつくことになるだろう。さて、論証的矩形上（もしくは意味ブロック内）にのこったスロットはあとひとつ、NEG PROBLÈME DC NEG AIDEという論証局面である。méchantとpas méchantがconverse関係にあることをかんがえると、このスロットはgentilとconverse関係をもちうる語として、pas gentilがはいるのが合理的かもしれない。対応する論証局面はNEG PROBLÈME DC NEG AIDE、「問題がないならたすけない」となるが、pas gentilにちかいはむしろPROBLÈME PT NEG AIDE、「問題があっても

11) 記述的否定、論争的否定の概念は Ducrot (1984) にくわしく、この2つにくわえて、「メタ言語的否定」についても詳述されている。また、これをうけて大久保 (2001) では発話の論争性について論じた。

たすけない」であるというのが、フランス語話者に共有される直観を反映したものといえそうである。

以上の観察を、論証的矩形上に配置してみよう。これにつづく (13) - (16) は、この意味ブロックを反映したディスコースの事例である。

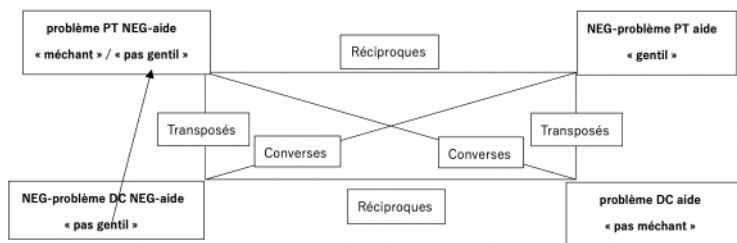


図 3 : gentil / méchant の論証意味論の意味

- (13) Pierre est *méchant* : il ne m'aide pas alors que je suis en difficulté.
 (14) Pierre est *gentil* : il m'aide même quand je ne suis pas en difficulté.
 (15) ??Pierre n'est *pas gentil* : il ne m'aide pas quand je ne suis pas en difficulté.
 (16) Pierre n'est *pas méchant* : il m'aide quand je suis en difficulté.
 (17) Pierre n'est *pas gentil* : il ne m'aide pas alors que je suis en difficulté.

pas gentil をむりやり NEG PROBLÈME DC NEG AIDE にむすびつけた (15) はやはり不自然で、むしろ *méchant* とおなじ内在的論証 PROBLÈME PT NEG AIDE を共有しているとかがえたほうが自然である ((17) 参照)。

以下は理論的仮定にとどまることで、歴史言語学的根拠はないが、少なくとも現代フランス語では、gentil と converse 関係にある pas gentil は、移動して、もとあった位置と transposé 関係にある位置を (*méchant* とともに) しめている。そして、規範的偏向はつねにこの方向にしかおこらないことが観察される。では、論証的矩形上の NEG PROBLÈME DC

NEG AIDE を具現する単語はないのだろうか。本稿ではこれを、さきにふれた論争的否定としての *pas gentil* であるとかんがえる。*méchant* と同義にちかい意味にいわばくりあがった *pas gentil* は、*gentil* という評価への反論としての *pas gentil* ではなく、否定辞を利用して *pas gentil* でひとまとまりの意味をあらわし、いわば緩叙法的に *méchant* にちかい意味をあたえられている記述的否定である。これにたいして、論争的否定の *gentil* は、*gentil* という判断をしりぞけるための発話の述語となり、そこでは緩叙法的な意味のつりあげは生じていない。

(18) *Pierre n'est pas méchant, mais il n'est pas gentil pour autant.*

このディスコースの後半にあらわれる *pas gentil* には、*méchant* にちかい意味があたえられているわけではない。なぜなら、ここでの *pas gentil* は論争的否定によるものだからである。その判断には、文末の *pour autant* の存在がさいている。前半部分で *pas méchant* とのべたことで、では *gentil* なのかという想定が生じることにたいして *pas gentil pour autant* とくぎをさすことでこれに反論するために *pas gentil* が発話され、その意味での *pas gentil* には、論証局面 NEG PROBLÈME DC NEG AIDE がよくなじむ。そのことは、(18) を論証局面でパラフレーズしたつぎの (19) の自然なながれからも納得できることである。

(19) *Pierre, il m'aide quand je suis en difficulté, mais il ne m'aide pas du tout quand je ne suis pas en difficulté ; c'est-à-dire, il n'est pas méchant, mais il n'est pas gentil pour autant.*

2.3.2. 規範的評価述語における規範的偏向② : *intelligent/bête*

2.3.1. の類例として、意味ブロック理論でしばしばひきあいだされる評価述語の事例 *intelligent/bête* についても確認しておこう。ここにおいて、のぞましき述語の優位語の否定 *pas intelligent* の意味のつりあ

げが、transposé 関係にある論証側面にむかうことが観察される。また、意味のつりあげによって記述的否定としての pas intelligent がいったん不在になった論証局面 DIFFICILE DC NEG COMPRENDRE には、論争的否定としての pas intelligent がむすびつくことは、以下のような例で確認できるだろう。(21) は (20) の pas bête, pas intelligent を、これらにむすびつく論証的連鎖におきかえたものである。

- (20) Pierre n'est pas bête, mais il n'est pas intelligent pour autant.
 (21) Pierre, il comprend bien si ce n'est pas difficile, mais quand c'est difficile, il ne comprend pas.

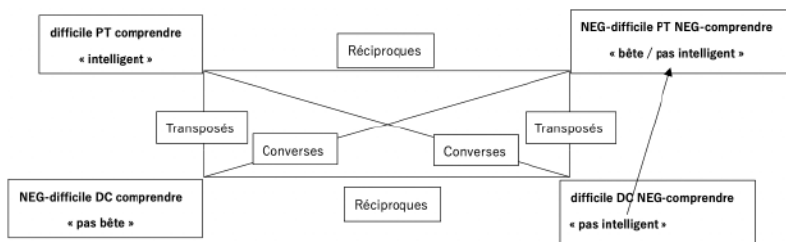


図 4 : intelligent / bête の論証意味論的意味

- (22) Bien que ce soit un texte difficile, il l'a tout compris : il est *intelligent*.
 (23) Ce n'est pas un texte difficile, et pourtant il ne l'a pas compris : il est *bête / n'est pas intelligent*.
 (24) Comme ce n'était pas un texte difficile, il l'a compris : il n'est pas *bête*.

2.4. 規範的偏向はのぞましさ述語の定義属性か

規範的偏向をもつことが、のぞましさ述語の十分条件であることはすでにのべ、さらに必要十分条件となる可能性についてもふれてきたが、大久保 (2020) でのべたように、一見するとのぞましさ述語のようにおもわれるものが、規範的偏向をもたないケースがあり、これらについて

「有利さ述語」という別の名称をあたえて議論を整理した。そのうえで、規範的偏向が、やはりのぞましさ述語にのみみられる偏向であり、かなり厳密にのぞましさ述語をそうでないものから区別する基準になる性質であることを、論証的矩形をふたたび援用しながら論じる。

一見のぞましさ述語のようにみえて、規範的偏向をもたないもののおそらくほとんどは、大久保（2020）で「有利さ述語」と名付けたカテゴリに属するとかんがえられる。有利さ述語と判断できる典型的な例は大久保（*ibid.*）でも詳述した *riche/pauvre* のペアである。

(25) Il est {favorable/*défavorable} d'être riche.

(26) Il est {*favorable/défavorable} d'être pauvre.

このように、*riche/pauvre* のペアでは *riche* がのぞましさ優位述語で *pauvre* が劣位述語であることは、文脈の支援なしで一目瞭然のように感じられるが、そのいっぽうで、規範的偏向が生じることはない（図5および(27) - (30) の例参照）。

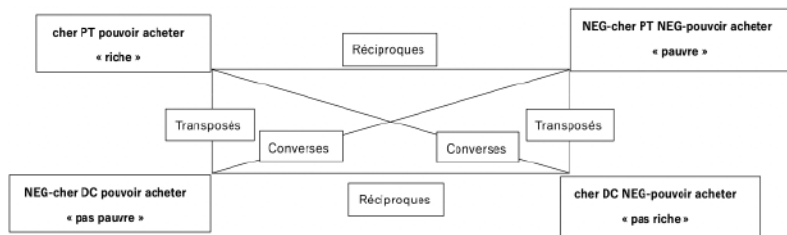


図5 : *riche/pauvre* の論証意味論的意味

(27) Comme il est *riche*, il peut se permettre d'acheter cet objet très cher.

(28) Il est *pauvre* : il ne peut pas acheter ceci bien qu'il ne coûte pas cher du tout.

(29) Il n'est *pas riche* : si c'est cher, il ne peut pas acheter.

(30) Comme il n'est *pas pauvre*, si ce n'est pas cher, il peut acheter.

以上のことから、規範的偏向は、のぞましさ述語同定の基準として完全なものではないのだろうかという疑問が生じるが、本稿では、規範的偏向基準はそれにもかかわらず有効で、また有効であることから不要な混同を回避できるとかんがえる。経済的富裕 *richesse économique* は、功利主義的な観点からするとアドバンテージではあるが、それは *gentillesse* のような倫理的美徳とは質のことなるものである。同様に、経済的貧困 *pauvreté économique* は倫理的悪徳ではない。規範的偏向が生じるためには、ある種規範的な完全主義が必要になる。たとえば *pas beau* であるものは、ただちに *laid* とみなされるが、そのような意味の特徴が *riche/pauvre* にはかけているのである。

このように、述語レベルで、言語が規範主義的評価と功利主義的評価を区別しており、その区別が言語をまたいで有効であることは興味ぶかい事実である¹²⁾。*riche/pauvre* 以外の境界線的な事例をいくつか確認しておこう。

rapide/lent

(31) ?*Cette voiture n'est pas rapide, mais elle n'est pas lente non plus.*

(32) ?*Il n'est pas rapide dans son travail, mais il n'est pas lent non plus.*

(33) *Ce courant n'est pas rapide, mais attention, il n'est pas lent non plus.*

速度は本来倫理的な美徳とはいえないはずだが、そこから *rapide/lent* を

12) 大久保 (2020) では、日本語、英語の事例をあつかっている。もちろん、言語に固有の特徴はあって、いまみた *riche/pauvre* に関してフランス語や英語 (*rich/poor*) には、経済的富裕さと倫理的ゆたかさを区別する語彙的手段がないが、日本語では前者を「かねもち」／「貧乏」、後者を「ゆたか」／「まずしい」といわけることができ、「ゆたかではない」は規範的偏向をみちびく。

有利さ述語とみなして作例した (31)、(32) はそれでも不自然に感じられる。riche/pauvre の例で、経済的アドバンテージ要因はのぞましさ述語をうみださないとしたが、自動車にとっての速度、しごとの高能率もたらす恩恵は、もはや美德のようにみなされるということなのかもしれない。他方、「急流」を主語とする (33) では、意味のつりあげはおこらず、またここでの rapide は有利さ述語にもあてはまらない、単純な中立評価述語のようにおもわれる。

jeune/vieux

(34) Mon fiancé n'est pas jeune, mais il n'est pas vieux non plus.

フランス語では、jeune も vieux も「のぞましさ」の観点から評価するのがなかなか厄介である。jeune は「わかわかしさ」という肯定的なニュアンスをまとうこともあれば、「未熟」という否定的な意味あいになることもあり、vieux は âgé などとの対比で「古い」というマイナスイメージが優勢であるいっぽうで、「老練」の意味では肯定的である。したがって、この対義語ペアを本稿での述語の分類に単純にあてはめるのはむずかしいが、年齢を比較的中立的にのべている (34) の例では、中立的评价述語と判断されるようである。

air pur/impur

(35) ??L'air n'est pas pur, mais il n'est pas impur non plus.

pur という語にも特殊な点がある。「純粹さ pureté」とは、amour pur のように、人格や精神的なことがらについて使用されるときには美徳性をおびるが、物質については、たとえば or pur というのはその金の純度の完全性以上のものをつたえる意味内容をもつわけではない。他方、pureté とは、その語義のなかに、わずかでも pur といえない事態になれば impur となることを意味内容としてもっている特殊な単語である。空気が pas

purということは、その否定要因がわずかでも impur 側に意味のつりあげがおこり、(35) が奇妙なディスコースとなる。

以上、いくつかの境界線の事例を観察したが、規範的偏向とは、要するに反意語ペアの優位語に意味のつりあげをおこすことで、その「純粹性」を担保する意味的操作といえることができるのではないだろうか。

3. 結論にかえて

本稿では、これまでの研究にもとづき、反意語のペアとそのそれぞれの否定が、意味ブロック理論の観点からどのように記述できるかということについての試論を提示した。発話を評価的発話と確認的発話にわけ、前者の述語をさらに中立的評価述語とのぞましさ述語に分類するという大久保(2020)の成果をさらに展開し、それらが論証的矩形にどのように配置されるのかについて論じたうえで、のぞましさ述語の定義属性としての規範的偏向の性質(意味のつりあげ)を矩形上で記述し、それによって矩形上のあきスロットには、論争的否定としての pas Y が復帰することを確認した。また、のぞましさ述語に意味的に類似したカテゴリとして有利さ述語の記述を精緻化し、功利主義的なディスコースと、倫理的なそれとがラングのレベルで厳に区別されることをのべた。そして最後に、それでも両者の境界線の事例が観察されることをいくつかの事例とともに考察した。

こうした議論をとおして、評価述語を、その評価の尺度上に配置することで定義しようとする指示主義的な言語観に抗しつつ、論証意味論の観点から、評価述語をただしく記述できる可能性をしめすことができたが、今後はさらにおおくの事例と実例の分析をふかめ、論証意味論そのものの発展に寄与する事例研究となるよう立論をこころみてゆきたい。

(本学教授)

引用文献

- Anscombre, J.-C. & O. Ducrot (1983), *L'argumentation dans la langue*, Éd. Mardaga, Bruxelles-Liège-Paris.
- Behe, L, M. Carel, C. Denuc, et J.C. Machado (eds) (2021), *Cours de sémantique argumentative*, Pedro & João Editores, São Carlos.
- Carel, M. (2011), *L'entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*, Éditions Honoré Champion, Paris.
- Carel, M. (2021), « Préface : La Sémantique Argumentative » dans Behe, L, M. Carel, C. Denuc, et J.C. Machado (eds.).
- Delanoy, C. P, « Les relations entre aspects argumentatifs : les concepts de conversion, réciprocité et transposition », Behe, L, M. Carel, C. Denuc, J. C. Machado (eds) (2021), 101-110.
- Ducrot, O. (1973), *La prévue et le dire*, Tours, Mame.
- Ducrot, O. (1984), *Le dire et le dit*. Paris, Les éditions de minuit.
- Gomes, L. & Ch. Dall' Cortivo Lebler « Les concepts d'aspect (normatif et transgressif) et d'argumentation (interne et externe) », Behe, L, M. Carel, C. Denuc, J. C. Machado (eds) (2021), 85-99.
- Lescano, A. (2011-2013) « La Théorie des blocs sémantiques », Document de travail mis en ligne en 2011. Dernière modification février 2013.
- 大久保朝憲 (2001) 「緩叙法的否定と誇張法的否定」『關西大學文學論集』51(1), 1-18.
- 大久保朝憲 (2020) 「のぞましさ述語と有利さ述語」『關西大學文學論集』70(3), 149-175.
- 大久保朝憲 (2016) 「評価述語の規範的偏向とアイロニー」, 『關西大學文學論集』66(3), 313-345.
- 大久保朝憲 (2018) 「語彙的評価語の否定における規範的偏向：“Barack Obama is the first black president of the US”の両義性をめぐって」, 『日本語用論学会 第20回大会発表論文集 第13号』17-24.

